

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。  
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に HB 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、  
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の ア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを  
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、  
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き  
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 彼は幼年より秀才の誉れが高い。

(2) 入念に準備をしてきたので、発表会の成功は必定だ。

(3) 自分が住んでいる町の沿革について調べる。

(4) 彼女は得心がいった様子でうなずいた。

(5) 二人は家賃を折半して暮らしている。

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で

書け。

(1) どんなに頑張っても一日に三冊の本を読むのがセキの山だ。

(2) 孫に会ってソウゴウを崩す。

(3) 毎日続く夏の暑さにヘイコウする。

(4) 新しい美術館のラクセイ式に参加する。

(5) メイキョウスイの心持ちで試合に挑む。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉

には、本文のあとに〔注〕がある。)

紙を専門に取り扱う会社を退職した神井航樹は、出版社に再就職し、営業部に配属された。本を書店に置いてもらうため、主要な書店をまわって営業をするものうまくいかない。注文が取れないまま会社に戻ることをためらっていたとき、航樹は訪問書店のリストに載っていない小さな本屋の存在に気が付いた。いったん通り過ぎたが、思い直して店の前まで戻った。

開け放たれた狭い出入口からなかをのぞくと、店内はしんとして、客はだれもいない。広さはせいぜい二十坪くらい。奥のレジに年配の男がちんまりと座って、むずかしそうな顔をして売上スリップをいじっている。

売上スリップとは、店売りの本のページのあいだに挟み込まれている二つ折りのカードで、表面が補充注文伝票、裏面が売上カードになっている。本が売れた際にレジで店員が抜き取り、追加注文の際に使ったり、まとめて出版社に送ったりする。送付した売上カードの枚数によって報奨金を出す出版社もあるからだ。

「あー。」

航樹はおそろおそろ声をかけ、出版社名を名乗り、名刺を差し出し挨拶をした。

「うちの店に版元の営業が来るなんて、明日は雪になるんじゃないか。」  
A~~~~~  
メガネを鼻梁の先にずらした店主らしき男が、上目遣いで航樹をじろりと見た。

冗談のつもりかもしれないが、航樹は笑う気になれず、「失礼ですが、店長さんですか？」と尋ねた。

「店長さんにも、こんな小さな店、おれひとりでじゅうぶんだろ。」

「はあ。」

訪れたことを早くも後悔しはじめた航樹は、さっさと営業をすませようとカバンから新刊注文書を取り出した。

すると机に置いた航樹の名刺をにらんでいた五十代半ばくらいの店主が、「冬風社<sup>とうふうしゃ</sup>って、潰れたんじゃないやなかったっけ？」と嫌なことを言い出しました。

「へえー、それで『新社<sup>\*</sup>』ってわけだな。」

店主はようやく売上スリップから手を離れた。「昔はおたくにもスリップ送ったもんだけどな。」

「ということは、売ってもらってたってことですな。」

初めて聞く種類の反応に、航樹は頬<sup>ほお</sup>をゆるめかけた。

「なにも返ってこなかったけどな。」

「すみません。うちは報奨金制度はやってないもので。」

航樹は耳の上を搔<sup>か</sup>いた。

「で、今はどんな本出してるの？」

「来月の新刊は、理工書になります。新しいジャンルにもチャレンジしていく方針です。」

「へっ、理工書？ 冬風社が？」

<sup>(1)</sup> 店主の声が明らかにトーンダウンした。

航樹はかまわず新刊の説明をはじめたが、「棚<sup>たな</sup>を見りゃあわかるだろうけど、うちは専門的な理工書は扱ってないんでね。それに返品できなくなると困るから。」と素っ気ない。

「返品は随時受けつけます。その心配はありません。」

「縁起でもないけど、おたくが倒産<sup>とうさん</sup>したらどうなるよ。」

「——それは。」

言葉に詰<sup>つ</sup>まると、「あんた、新入社員かい？」と言われた。

「いえ、この七月から中途採用で入りました。」

「へー、今月からかい。そりゃあ、てえへんだ。この蒸し暑いのにきつちりスーツなんか着込んでるから、てつきり新卒かと思っちゃまった。」

「まあ、似たようなもんです。」

航樹は自嘲<sup>じちやう</sup>気味に返した。

「あんたら出版社の営業は、本は委託<sup>いだい</sup>だから心配いりませんっていつも言うらしいけど、こっちはこの狭い店で食っていかなきゃならない。一冊<sup>\*</sup>とは言え、面出<sup>\*</sup>しならそれなりのスペースを占<sup>し</sup>めるんだ。この限られたスペースで、年間いくら売らなきゃ食っていけないか、あんたにわかるかい？」

「いえ、わかりません。」

航樹は素直に首を横に振った。

たしかにそうだ。自分のなかには、委託なのに、返品できるのに、なぜ置いてくれないのだ、と思う安易な気持ち<sup>B</sup>がどこかにあった。かく見<sup>く</sup>見ていたのだ。

「うちみたいな店は、入ってくるかもわからない話題の新刊に期待するより、実際に売れた本を大事に売り続けるのさ。だからこの売上スリップは大切なんだ。この一枚の紙が、この店の売上を支えてくれる。」

「紙が、ですか？」

「そうさ。このスリップが、紙がなくなっちゃならねえのよ。食ってくためには。」

店主は口元をわずかにゆるめた。「おれは本が好きで、勤め人をやめてこの商売をはじめた。好きとはいえ、やってみれば、なかなかむずかしい商売だ。ほんとは、売れる本か、気に入った本しか店には置きたかない。おたくらが毎日営業してるようなでかい書店には、でかい書店の役割<sup>\*</sup>つてもんがある。けどな、うちにはうちの役割があると思ってるのさ。つまりは、この一枚の紙みたいにな。」

(2) この日初めて会った、小さな本屋の店主の言葉は、思いがけず航樹の胸に畳みかけるように問いかけてきた。会社をやめた自分は、果たして自分の役割をしっかりと意識しているのか。自分はなんのために、出版社に転職したのか。それは、もっと自分らしくありたかったからじゃないのか。好きでこの道を選んだのだ。営業であれ、もっと自分らしいやり方で、好きなようにやるべきじゃないのか。

航樹はカバンから、今度は既刊の一覧注文書を取り出した。

「失礼ですが、このなかにこの店で売っていただいた本はありますか？」

「ん？」

店主は注文書を受け取り、目を細めた。「ああ、まだ絶版じゃないんだな、こいつらは。」

「店のなかを、拝見させてください。」

「好きにしな。」

店主が背中を向けたとき、かなり年配の女性客が濡れた傘を引きずるようにして店に入ってきた。

「届いとるかなあ？」

女性はいきなり店主に声をかけた。

「はいはい、松田様。届いてますよ。」

店主は急に十歳くらい若返ったような明るい声を出し、レジ横の棚から婦人雑誌を抜き取った。「いつもありがとうございます。」

航樹はレジの前を離れ、文芸書の棚の前に立った。棚には、今ベストセラーになっている話題の単行本の類いは見あたらない。取次からの配本がないのか、すでに売れてしまったのか。しかし何冊か、航樹が過去に読んだ、思い出深い本が棚に差してある。こちんまりとしているが、いい棚だな、と思えた。

(3) 航樹は肩の力を抜いた。マニュアルばかりを頼りにするのも、書店を坪数で選ぶのも、考えものだ。自分の目でたしかめなければわからない、

経験しなければわからないことがあるはずだ。

客が去ったあと、「はいよ。」と店主の声がした。

レジの前にもどると、店主が「一」の文字を見つけた。

「まあ、せっかく来てくれたんだ、おたくの本、またうちに置いてみっから。」

受け取った注文書の書名の欄に、「一」の文字を見つけた。

「ほんとうですか。」

航樹は思わず声をうわずらせ、頭を下げた。「ありがとうございます。」

「少なくともいいけどな。」

「とんでもないです。」

「あんたら出版社の人間は、新刊シンカンって出るときだけ騒ぐけど、お客さんにとっちゃ、その日初めて手に取った本、その本こそが新刊なんだよ。」

静かな店内に、店主の声は心地よく響いた。

なるほど、そのとおりかもしれない。

「まあ、せっかく来たんだ。雨宿りでもしていきな。」

気がつけば、午後六時をまわっていた。これまで営業したなかで一番店に長居し、会話が続いた。店主は静かにスリッパを数えながら、ときおり航樹が投げかける問いかけに答えてくれた。

「それじゃあ、またお伺いします。」

航樹は帰りしなに声をかけた。

(4) 店主は「へっ。」と笑い、「無理することはねえよ。」と言いながら、そこで初めて名刺を渡してくれた。

表に出ると、思いがけず雨は上がっていた。

歩きながら、受け取った名刺をよく見ると、使われている紙は、自分が仕入れていた紙、スターエイジにちがいがなかった。

懐かしい手触りを味わいながら、見つめる名刺。その名刺に印字された書店名の上には、こう記されている。

「人生を変える本との出会いのお手伝い」

人生を変える本との出会い。まさに自分が何度か経験したことでもある。

そんな本と読者との出会いを手伝うことが、今の自分の仕事でもあるのだ。

航樹はそのことがうれしく、そして誇らしかった。

「よしっ。」

<sup>(5)</sup> 航樹はわざと気持ちを出した。

そして、まだ西の空が明るい、夏の夕暮れの道を駆けへと急いだ。

もう一軒、いや二軒、これから書店をまわることに決めて――。

(はらだみずき「銀座の紙ひこうき」による)

〔注〕 新社――経営状況が悪化した冬風社は、「冬風新社」という名

で再起をかけて立て直しを図っている。

面出し――本の表紙を見せて並べること。

取次――ここでは、出版社と書店をつなぐ取次会社のこと。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 店主の声が明らかにトーンダウンした。とあるが、それはなぜ

か。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 冬風社が一度倒産しそうになったことを思い出して、売れ残った本を返品できなくなると感じ、不安に思ったから。

イ 以前取引があった冬風社には親しみを覚えたが、一方的に話し続ける航樹の態度を見て、不快感を隠せなかったから。

ウ 冬風社の本にいったん関心を示したものの、店に置いても売れない分野の本であるとわかり、興味がそがれたから。

エ 新しい分野に事業を広げようとする冬風社は、従来の伝統を軽視する会社になってしまったと思い、落胆したから。

〔問2〕<sup>(2)</sup> この日初めて会った、小さな本屋の店主の言葉は、思いがけず

航樹の胸に畳みかけるように問いかけてきた。とあるが、この表現から読み取れる航樹の様子として最も適切なものは、次のうち

ではどれか。

ア 初対面の店主が語った内容と現在の自分の状況が予期せず重ね合わせられ、自分に対する疑問が次々とわき上がり、仕事への思いを見つめ直している様子。

イ たまたま出会った店主の言葉が胸に響き、これまでの自分に対する反省の念が次々に生じ、自分が思っていた以上に営業は難しい仕事だと痛感している様子。

ウ 初対面の店主の話の意図が分からず、店主と自分の状況とを繰り返し重ね合わせることで、想像以上に苦勞してきた店主を理解しようとしている様子。

エ たまたま出会った店主の話の意図が分からず、店主と自分の状況とを繰り返して、店主と自分との役割を比べることで、店主の生き方を理想的に思

い始めている様子。

イ たまたま出会った店主の話の意図が分からず、店主と自分の状況とを繰り返して、店主と自分との役割を比べることで、店主の生き方を理想的に思

〔問3〕<sup>(3)</sup> 航樹は肩の力を抜いた。とあるが、この表現から読み取れる航樹の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 話題の単行本がない本棚を見て、新刊の本は欲しいと思う人が現れて自然と売れるのだと気が付き、自分が躍起になって頑張らなくてもよいのだと安心する様子。

イ 本棚を見て、その書店に合った本があるのだと思い至り、マニュアルや書店の大きさをばかりを気にして営業の成果を上げようと力んでいた気持ちをゆるめる様子。

ウ かつて読んだ本が並ぶ棚を見て、思い出に浸って感傷的な気分になり、これまでの自分の営業の方法では結果が出ないのも当たり前だと実感して反省する様子。

エ 実際の本棚を見て、マニュアルや書店の大きさなどの情報から形式や数字以上の意味を分析できていなかったと冷静に振り返り、緊張をほぐそうとしている様子。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 店主は「へっ。」と笑い、「無理することはねえよ。」と言いながら、

そこで初めて名刺を渡してくれた。とあるが、この表現から読み取れる店主の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 航樹の別れ際の挨拶に対して、このような小さい店にわざわざ営業に来る必要はないとしながらも、航樹に好感を抱き、再会を期待する気持ちを表している様子。

イ 航樹の言葉を次の取引への意思とみなし、このような小さい店にわざわざ営業に来る必要はないと返しつつ、渡し忘れた名刺を出して、次の注文を約束する様子。

ウ 航樹の言葉を社交辞令と感じ、このような小さな店にはわざわざ営業に来る必要はないとして、わずかな注文しかできない罪悪感から話を切り上げようとする様子。

エ 航樹の新入社員のような元気の挨拶に対して、このような小さい店にわざわざ営業に来る必要はないとし、若い社員の苦勞をねぎらおうと気をつかっている様子。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 航樹はわざと気持ちを声に出した。とあるが、この表現から読み取れる航樹の気持ちとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 航樹は本と読者の出会いを大切にすると店主と巡り会った。本をいくつかしむ気持ちを持ち続けていれば、今後自分の人生に影響を与えるような本を見つけれはるはずだと確信している。

イ 航樹はうまくいかない自分の仕事に対して不満を募らせている。しかし、困難を乗り越えてこそ一人前の社会人になれるのだと考えを改め、自分に気合いを入れることで覚悟し直している。

ウ 店主と会話が続けて営業がうまくいったことで、航樹は自信を取り戻した。本の注文を取れた喜びから仕事の意義を見出すことができ、早く次の本屋に向かおうと意欲に満ちあふれている。

エ 本は読者の人生を変える可能性をもつことを、かつて航樹は経験した。本と読者の出会いを支える自分の仕事に喜びと誇りを感じ、前向きに仕事に励もうと自分を奮い立たせようとしている。

〔問6〕 〰〰〰部A〰Dについて、その表現や内容を説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

A メガネを鼻梁の先にずらした店主らしき男が、上目遣いで航樹をじろりと見た。には、店主を恐れて引け目を感じている航樹の気の弱い性格が表されている。

B かるく見ていたのだ。には、大きい本屋では難しい返品も小さい本屋なら気軽にできるはずだと考える航樹の心境が表されている。

C 店主は注文書を受け取り、目を細めた。には、懐かしい本を見つけたことであれしさを感じている店主の様子が表されている。

D 店主が一覽注文書の右上に、この店に割り振られたコード印である番線印を、今まさに押すところだったには、番線印を押す瞬間を航樹に見せようとする店主の思いやりが表されている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

哲学は、科学とは異なる知のあり方をしてしている。古代のアテネでソクラテスがソフィストの知識の妥当性を問いつつに、哲学は既存の知識の再検討を主な任務としている。それは、社会に存在している常識や知識や技術を、人間の根本的な価値に照らし合わせてあらためて検討することである。哲学は社会に既に存在している知識に対して、距離をとって判断する「メタ」の立場をとる。その意味で、哲学はもつとも素朴であると同時に、もつとも高次の視点から世界を捉える学問である。その際に哲学がとるべき視点は、いかなる専門家からでもない、いかなる職業や役割からでもない、ひとりの人間ないし市民からの視点である。哲学という学問がもつとも一般的であり、特定の分野に拘束されないという特徴はここから来ている。

しかしながら、一九世紀になって哲学が大学の一専門分野として講壇化されてからは、哲学は他の科学と同じく一種の専門科学であろうとしてきた。西洋という文脈で言えば、講壇化は、哲学の専門家を生み出し、彼らが哲学を市民に教育するというスタンスを生み出した。専門家であり教える側であるという大学人としての立場は、哲学者のアイデンティティにすらなっていた。

(1) 一八世紀の啓蒙主義の時代の哲学と、一九世紀以降の現在までの講壇化した哲学の大きな違いは二つあるように思われる。ひとつは、後者が、専門用語を駆使するようになり、難解になり、それ以前の理論についての知識なくしては理解できなくなったことである。古代ギリシャの哲学でも、あるいは、啓蒙時代の哲学、たとえば、ルソーやロック、アダム・スミスでもいいが、平易な日常の言葉で書かれ、ある程度の教養のある人間ならばその内容を理解するのに前もつての知識はいらない。どの哲

学者でもその根本的思想をきちんと把握するのは容易ではないとしても、一八世紀の啓蒙主義の哲学者の著作を読むのに事前の知識はいらない。これに対して、一九世紀以降の哲学は、専門化し、それを理解するには長い専門知識の集積を要求するようになった。二〇世紀の二つの現代哲学の潮流、分析哲学と現象学も同じである。それぞれの潮流の専門用語は特殊な意味を帯び、哲学者の間でもそれを共有できなくなっている。互いに互いの理論的前提が受け入れられずに、学派によって没交渉となる時代が続いた。(2) これは学問としては精緻化を意味するが、哲学という学問の役割を考えたときには、入ってはならない隘路に踏み込んでしまったのではないだろうか。

もうひとつの違いは対話的な側面の消失である。古代哲学の対話篇についてはいうまでもないだろう。一八世紀までの近代哲学は、対話を内容としている著作がじつに多い。著名な哲学者の著作集の多くに、「対話」あるいは往復の「書簡」と題された作品が含まれている。ルソー、ダランベール、デイドロ、ヴォルテール、ロック、パークリー、ヒューム、ゲーテ、ライプニッツなどをあげれば十分であろう。その書簡の多くは、教養のある一般人との対話である。デカルトのエリザベト王女との書簡集は読み応えのある哲学的な対話である。しかし、一九世紀、とくに二〇世紀以降は、対話や書簡は、完成された哲学論文と比較して二次的で資料的な意味しか持たないと考えられるようになり、ましてや一般人との対話など大学の講義で行えばよい程度の扱いになってしまった。

これは、大学を中心とした近代的な知の編成に、哲学も飲み込まれたことを意味している。しかしこれにより、私たちは重大な、失うべきではない知的な営みを蔑ろにしてきたのではないだろうか。自然科学の実証主義的な研究手続きが定着するにつれて、真理は専門家だけによって見出され、一般人にはただ教育されるだけのものになってしまった。理論を検証し反証するという科学的な過程のなかには非専門家が入り込



む余地はなく、専門家同士の対話でさえ、せいぜい追試過程の一部となるだけである。知の専門化は、対話を用いるものとした。そうした専門知をバックにした政府や行政の振る舞いは、一般人に耳を貸さない問答無用のものとなっていくのは当然であろう。

復権させたいのは対話とそれによる思考である。<sup>(3)</sup> 対話は全体性を復元する協同作業である。ここでいう全体性とは、各分野に分断される前の知の全体性であり、ただ専門性によってではなく、人間が人間としてつながる全体性である。社会の全体性ということで誤解をしてほしくないのは、それが画一性や均一性を意味しないことである。対話的な全体性とはむしろ個人の差異化を意味する。対話は、独立の存在の間でしか成り立たず、異なった考えの間でしか成り立たない。しかしそれらの独立の存在は、対話というひとつの事業に関与している。これが対話による人間の結びつきの特徴である。対話は、振る舞いを管理し、画一化することなく、人々を共通のテーマによって架橋し共同させる。

現代の岐路において、良い方向に私たちの人生と社会を向かわせるには、専門化による分断を、対話によって縫い合わせる必要がある。あらゆる現代の知の中に対話を組み込み、社会の分断と人間と自然の分断を克服しなければならぬ。こうした根本に交流を有した知こそが、真の意味での教養と呼ばれることになるだろう。

しかし一般の人々はすでに対話の重要性について気がつき始めている。

<sup>A</sup>哲学カフェは、一九九〇年代初頭のフランスで生まれた。カフェに市民があつまり、哲学的なテーマについて自由に論じ合う集会である。

重要な決定には、権威に一方的に依存するのではなく、一般市民が関与しなければならぬ。政治的自律性を求める気運の中で、哲学的な対話が希求された。哲学カフェは政治的な意思決定のためだけに行われる

のではない。それ以前に、自分たちが直面している問題を根本まで掘り下げ、自分たちがどのような価値観からこの問題に相對しているのかをまず理解するための活動である。哲学カフェはまたたくまに全国に広がり、現在では数え切れないほどのカフェが自主的に運営されている。

時期を同じくして、学校や課外活動で、子ども同士が哲学的なテーマについて話し合う「子どもの哲学」と呼ばれる新しい教育が、日本のさまざまな場所で行われるようになった。とりわけ、小さな子どもを持つ親たちは、あいも変わらぬ記憶中心の学校教育に失望し、考え、議論する力を自分の子どもには持つてほしいと考えている。対話することが思考を刺激することを、子どもの親たちは直観的に知っている。哲学など抽象的なことには関心を示さないと言われていた小学校の低学年の子どもでも、「生きるとは何か」「賢いとは何か」「心はどこにあるのか」「普通とは何か」「時間に終わりはあるのか」などといったまさしく哲学的なテーマについて関心を持ち、大人とそれほど変わらない次元の議論を展開する。

<sup>B</sup>子どもの哲学とは、子どもに哲学の知識を教えることではまったくない。子ども同士で哲学的なテーマについて対話しあい、教員や親といった大人も子どもと一緒に真理を探索するのである。

子どもの哲学の歴史は、哲学カフェよりも長い。子どもを対象とした対話型の教育が試みられたのは、一九二〇年代におけるヘルマン・ノールやレオナルト・ネルズンといった哲学者の活動に遡ることができ、アメリカの哲学者であるマシュー・リップマンは、七〇年代初頭に「探求の共同体」という対話的な共同学習の方法を作り出し、子どもの教育に着手した。<sup>\*</sup>爾来、いくつもの国際学会が組織され、世界各地で実践がなされている。

哲学カフェやサイエンス・カフェ、子どもの哲学、地域の問題を根本的に論じる対話、企業での哲学的な対話、対話による人生相談（哲学

コンサルティング)、これらの活動をまとめて「哲学プラクティス」と呼ぶことがある。哲学的なテーマについて自由に論じる活動は、「哲学対話」と呼ばれるようになった。

哲学プラクティスとは、「おもに対話という方法をもちながら、哲学的なテーマについて共同で探求する実践的な活動」として定義されるが、国際的にはすでに数十年の活動の実績がある。日本国内でも、数年前に、全国規模の実践者の連絡会が組織され、哲学プラクティスに関連する事項を研究する学会も設立された。マスコミでもしばしば取り上げられるようになり、教育用のテレビ番組もシリーズ化された。中等教育でも関心を持つ学校が増え、探求型の授業に取り入れられている。

哲学対話に関心を持つ人は、さまざまな世代に渡っているが、とりわけ、若い世代や、子育てをしている世代に多い。かれらは、自分たちと自分たちの子どもの世代が直面している分断の問題には、これまでとは大きく異なった構想で取り組まねばならないこと、そしてそのために市民的な連帯を深めなければならぬことに気がついている。若い親世代は、自分たちが受けたものとは異なった、思考やコミュニケーション、探求活動に重きをおいた教育が必要であることをよく理解している。哲学対話が求めているのは、他者とともに真理を追求し、他者とともに人間の世界を組み直していくことである。科学は、世界の事実については知識を提供してくれても、価値や意味に関しては沈黙する。そうではなく、哲学対話では、他者とともに共同の世界を作り出していく知が求められている。

対話による共同的真理探求は、アカデミズムを超えて、市民が自主的に発展させている知的な活動である。

哲学と対話とは切っても切り離せない関係にあるにもかかわらず、対話をテーマとした哲学書は多くはない。実は心理学や認知科学においても、臨床的な分野以外では、対話を扱う研究は多くはない。また思考に

ついても、哲学においては推論や論理、認識をテーマにした研究はあっても、思考という人間の活動そのものをテーマとした哲学書は、意外にもあまり見当たらない。それは思考という活動が、単純に個人の中の推論的な能力だけで成り立っているのではなく、他者との対話や共同作業を通じて発揮される本来、複合的な能力だからである。

(河野哲也「人は語り続けるとき、考えていない」による)

〔注〕精緻化——細かく緻密になっていくこと。

隘路——狭くて通りにくい道。物事を進める上でさまたげとなるもの。

爾来——それ以来。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 一八世紀の啓蒙主義<sup>けいもうぎ</sup>の時代の哲学と、一九世紀以降の現在までの講壇化した哲学の大きな違いは二つあるように思われる。とあるが、一八世紀までの哲学と一九世紀以降の哲学の違いについて、八〇字以上、一〇〇字以内で説明せよ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> これは学問としては精緻化<sup>せいじちか</sup>を意味するが、哲学という学問の役割を考えたときには、入ってはならない隘路<sup>あいろ</sup>に踏み込んでしまったのではないだろうか。とあるが、「哲学という学問の役割を考えたときには、入ってはならない隘路に踏み込んでしまったのではないだろうか」と筆者が述べたのはなぜか。八〇字以上、一〇〇字以内で説明せよ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 対話は全体性を復元する協同作業である。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 対話は独立した一人一人の人間の差異を均質的なものに統合し、共通の価値観を生み出す働きをするから。

イ 同じテーマについて論じ合う対話という営みによって、異なる立場の人々が結びつけられることになるから。

ウ 異なる考えを持った者同士が対話することによって、規範<sup>きはん</sup>と秩序<sup>ちつじよ</sup>が生まれ、社会に対する人々の信頼が高まるから。

エ 専門家と一般人とが課題を共有して対話することで、専門家による啓蒙が進み、社会全体の知性が向上するから。

〔問4〕 くく部 A 哲学カフェ、 B 子どもの哲学、 C 哲学プラクティスの話題は、本文の展開においてどのような役割をしているか。最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 哲学カフェから探求型の共同学習の方法が生まれたように、新たな教育のあり方が他にも存在することを示す根拠となっている。

イ できるだけ若いうちに哲学対話を経験することが人生において重要であるという一般論を挿入し、問題提起につなげている。

ウ 哲学対話が重要視されている今日の状況を、科学の価値という観点から比較して分析し、論述方針の転換を図っている。

エ 哲学対話の重要性に対する理解が、日本でも一般の人々の間に浸透してきているということの具体例となっている。

〔問5〕 部 哲学的なテーマとあるが、次に挙げる①～⑧のうち、

「哲学的なテーマ」について考える事例の組み合わせとして最も適切なものはどれか。本文の論旨をふまえて、次のア～カから選べ。

- ① 夏休みの自由研究で「ダムはどのような構造か」ということについて調べ、学年集会で発表していくつかの質問に答えた。
- ② 地域の住民同士で「街の暮らしやすさとは何か」ということについて論じ合った。
- ③ 学校で「学ぶことにどのような価値があるのか」という話し合いをしたら様々な意見が出て盛り上がった。
- ④ 先生に「個性を大切にしない」と言われて、「私らしいとはどういうことだろう。」と、友達と話し合いながら帰った。
- ⑤ 会社の上司と一緒に、その月の売り上げ額から翌月の利益を予測した。
- ⑥ 創立一二〇周年を機会に、学校に制服は必要かということをし、生徒会役員で議論した。
- ⑦ 友人と一緒に数学の問題に取り組んだら、難しい問題を解くことができた。
- ⑧ 高校卒業後の進路を決定するにあたって、「自分にとってよりよい人生とはどのようなものか」ということを家族と話し合った。

- |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| イ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| ウ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| エ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| オ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| カ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |

〔問6〕 本文の内容について述べたものとして最も適切なものを、次のうちから選べ。

- ア 自然科学の研究方法が普及したことで、大学の授業で哲学を専門的に学ぶことができるようになった。
- イ 小学校低学年の子どもは抽象的なことには関心を示さないものの、哲学的なテーマについては高度な次元で議論する能力を持っている。
- ウ 社会をよくするには、他者とともに真理を追求し、共同の世界を作り出していく知が求められている。
- エ 対話という活動は、個人の推論や論理、認識からなる複合的能力であるため、哲学研究の中心テーマであり続けた。

次の文章A・Bは、平安時代の貴族菅原道真が、四十二歳で地方官として讃岐（今の香川県に当たる地域の国名）に赴任したことについて書かれたものである。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

赴任初年度、三〇日ほど雨が降らなかつたが、金光明寺で行われた仁王百講会（百の高座を設けて僧百人に『仁王経』を講じさせる法会）のおかげか雨が降った。道真はそれを祝して詩を詠んでいる。

秋に入り、道真は二毛（白髪）を発見した。晋の潘岳は三二歳で二毛を見たというが（潘岳「秋興賦」、自分は潘岳より一〇年老いて見た。なぜ初めて見る羽目になったかといえは、「海孺」（海の畔）に臥すためだという。「海孺」とは讃岐を指し、讃岐での愁いが二毛を生じさせたと考えているのである。）

九月九日、宮中では重陽宴が行われる日である。この日、道真は国府で小さな酒宴を開いた。そのときに詠んだ詩が残る。秋になつても旅先にあるかのような思い（「客思」）が入り乱れ、重陽になると一層その思いは募る、という心情の表現から始まるが、詩の後半は以下の通りである。

停盃且論輸租法

盃を停めて且く論ずるのだ輸租の法を。

走筆唯書弁訴文

筆を走らせて唯書くのだ弁訴の文を。

十八登科初侍宴

十八で「文章生試に」登科〔合格〕して初めて宴に侍った。

(1) 今年独对海辺雲

しかし今年は独り海辺の雲に對うだけだ。

「輸租」とは、徴税のこと。「弁訴」とは、訴訟を処理すること。

重陽宴では菊酒を飲み詩を詠むのだが、讃岐では国司としての業務を議論し書類を執筆する。讃岐守として業務に邁進するかのような姿だが、この詩の冒頭は、地方に来て「客思」入り乱れる心情を描いており、本来なら宮廷詩宴で菊酒を飲み漢詩を詠むはずが、それができない。重陽の日であるだけに、都での詩宴が想起され、守という立場への愁いが表出する。

翌年正月二〇日にも漢詩を詠んでいるが、題辭に「禁中内宴の日である」と自注を付しているのも、先の作同様、宮廷詩宴を想起してである。このように讃岐で宮廷詩宴や宮中行事を想起する作は、讃岐赴任後半にも見える。「九日偶吟」では、以下のように詠む。

客中三見菊花開

客の中三たび菊花が開くのを見るが、

只有重陽毎度來

只重陽の日が度毎來ることが有る。

今日低頭思昔日

今日頭を低れて昔日を思う。

紫宸殿下賜恩盃

紫宸殿下で恩盃を賜ったことを。

讃岐に赴任して三年が経ち三度目の重陽の日を迎えた、それでも昔日、重陽宴に参加したこと、重陽宴が開かれる紫宸殿で天皇から盃を賜ったことを思い出すのである。

さらに「正月十六日宮妓の踏歌を憶う」は、宮中での「踏歌」（足を踏みならして歌う舞踏）を思う詩だが、その末尾に「佳辰公宴の日に属する毎に、空空しく客衣の襟を「涙で」湿して損うのだ」と、都の天皇主催の宴を思い出すたびに涙を落とすのである。讃岐守としての自分を「（ ）」と、あくまで旅先にいると表現しているのも、道真の心情を表しているよう。道真は讃岐守在任中、都を、そこでの行事、特に宮廷詩宴を思い出す旅人として自分を描いていた。

## B

讃岐赴任に不満を持っていた道真だが、この年冬に詠んだ「寒早十首」の連作は、国守の立場から讃岐の州民を描いている。

本作は、法制史学者の瀧川政次郎が、「寒気の来るのをいち早く感ずる」「貧窮人の患苦が綿々と述べられ」「人民が課役の重圧にあえいでいる」ことを詠んでいる「文学史上の重要史料であるのみならず、また法制史上の重要史料でもある」と評した作品でもある。

すべての詩の韻字に「人・身・貧・頼」の四字を用いている。四字は「人の身は貧しきこと頼である」の意で、これを韻字とした五言律詩の一〇首連作である。

取り上げられるのは「走還人」(租税の負担から逃れるため戸籍の地から離れたけれども悔いて帰ってきた人)「浪来人」(税から逃れるために浮浪逃散した人)「葉圃人」(葉園で諸々の葉を学ぶ人)「駅亭人」(駅伝輸送の労働に従事する人)「賃船人」(船に雇われて働く人)「釣魚人」(売塩人)「採樵人」(きこり)と、まさしく「課役にあえぐ」「人民」を詠んでいる。

「寒早」とは、寒気が早く来ること。詩の第一句目はすべて「何人に寒気が早いのだ」という問いで、それに「寒は早い〇〇人に」と答えて始まる。「釣魚人」を詠んだ作を見よう。

何人寒気早

何人に寒気が早いのだ。

寒早釣魚人

寒は早い魚を釣る人に。

陸地無生産

陸地に生産はなく、

孤舟独老身

孤舟に独り身を老いていく。

曩糸常恐絶

糸を曩めて「糸が」絶えるのではと常に恐れ、

投餌不支貧

餌を投げて「魚を釣っても」貧を支えられない。

売欲充租税

「魚を」売って租税に充てようとして、

風天用意頻

風はどうだ天はどうだと用意(気にかけること)頻々

ある。

讃岐の釣人を詠じた作である。道真は都時代にも釣人を漢詩に詠み込んだことはあった。ただし、それまでの作は、直接釣人を見て詠んだのではなく、中国戦国時代の屈原「漁父」以来長く詠み続けられた、俗世間から離れて俗事にまどわされない釣人像を踏まえた、いわば観念化された存在であった。その点、寒早十首の釣魚人は、讃岐で実際に見、そのうえで表現されていると考えられる。

これまでの道真には、宮廷詩宴での献詩、友人との贈答詩、景物に寄せた風物詩などはあっても、このような階層の人々に焦点を当てた作品は見えない。これは、道真に限らず他の漢詩人でも同様である。

寒早十首は、このように在地の人々の苦しみを描いた作として注目される。<sup>(4)</sup> その表現に律令語(法律用語)を用いていることも特徴である。最初の「走還人」の「走還」などがそうで、都時代の作品にもいくつか見えるものの、寒早十首を含め讃岐時代に格段に増える。

道真は讃岐赴任を愁えながら、このように讃岐の人民を詠み、国司の職を詠む。このような作は讃岐から都へ戻ると激減する。というよりも、在地の人民の苦しみを詠む作品は見当たらなくなる。

これはどのように考えるべきか。国守としての立場ではなく、問民苦使(地方行政を監察する官)の立場で詠んだという見解もあるが、詩人無用論に関わると考えられる。<sup>(5)</sup> 儒家から発せられたそれは、漢詩や漢詩人など政治に無用だという批判であった。道真はそれに対して、宮廷詩宴で献詩を行う詩臣を標榜していた。

讃岐で人民の苦しみや国司の職務を詠むのは、地方政治の問題・課題を漢詩を用いて表明し、告発することになる。まさしく政治に有用な詩作を試みたのである。詩人無用論への反駁だと考えられる。

こうして讃岐一年目は暮れていく。大晦日に詠んだ「旅亭の除夜」では、「苦だ思ふ洛下の新年の事を。再び家門に到るのだ一夢の中で」と、

都の新年を思い、夢の中で都の自邸に帰っている。讃岐守として、讃岐の人々を思いつつも、やはり都の、我が家を思うのである。

(滝川幸司「菅原道真」による)

〔注〕 晋の潘岳——中国の王朝である西晋の文人の名。「秋興賦」

は潘岳の詩の名称。

重陽宴——陰曆九月九日(重陽の日)の節句に皇居で行われ

た観菊の宴。

文章生試——平安時代の役人の養成機関の試験。

菊酒——重陽の節句に飲む、菊の花を浸した、または浮かべた酒。

禁中——皇居の中。

偶吟——ふと心に浮かんだことを詩歌に詠むこと。

紫宸殿——平安京の皇居の建物の一つ。

讃岐の州民——道真が国守として治めていた讃岐の地の人々のこと。

こと。

課役——人民に課せられた税や労役のこと。

屈原「漁父」——古代中国の詩人屈原の作として伝わる文章。

儒家——孔子に始まる中国古来の政治・道徳の学である儒学を

修めた者。

反駁——他人の意見や批判に反対して論じ返すこと。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 今年独对海辺雲の句に込められた道真の心情を、筆者はどのよ

うに考えているか。その説明として最も適切なものは、次のうち

ではどれか。

ア 大切な家族を都に残して、たった一人で異郷に赴き、慣れない仕事をしなければならぬことに嫌気がさしている。

イ 新たな土地での業務に追われてしまい、酒宴さえも開くことのできない境遇におかれた身の上になりきれなさを感じている。

ウ 都から遠く離れたさびしい土地で、誰にも理解されないままたった一人で年老いていく我が身をうらめしく思っている。

エ 国司としての仕事に力を尽くしながらも、折に触れて宮中での詩宴を思い出し、都を遠く離れた任地にいることを嘆いている。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 讃岐守としての自分を「( )」と、あくまで旅先にいると表現している。とあるが、( )に当てはまる最も適切な漢字一字を、

本文中からそのまま抜き出して書け。

〔問3〕「釣魚人」を詠んだ作とあるが、その説明として適當でないものを次のうちから一つ選べ。

ア 苦しむ人民の様子を描いた作品として、史料的な価値が評価されている。

イ 漢詩の伝統を受け継いで、俗事にまどわされない人物として釣人を描いている。

ウ 道真が赴任後に讃岐の地で実際に見た釣人の様子を、詩の中に表現している。

エ 十首連作のうちの一首で、四字の韻字と第一句目が他の詩と共通している。

〔問4〕<sup>(4)</sup> その表現に律令語（法律用語）を用いていることも特徴である。とあるが、「寒早十首」の詩にそのような特徴が生じた理由について、筆者はどのように述べているか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 道真は、地方官として赴任したことを不満に思いつつも、国守としての立場で漢詩を詠んでいるから。

イ 道真は、国司の仕事を具体的に表現することで、観念的な漢詩の詠み方を否定しようとしているから。

ウ 道真は、都に戻ることを早く許されたいと願うゆえに、職務に忠実に励む姿勢を詩で示しているから。

エ 道真は、宮中の行事を思うことが習慣化していて、都に生まれた貴族としての立場を重視しているから。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 道真はそれに対して、宮廷詩宴で献詩を行う詩臣を標榜していた。とあるが、「詩臣」という語は、ここではどのような立場を表す語として用いられているか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 詩作によって積極的に情報を発信することで、都で漢詩人が広く重用されるべきだと訴える立場。

イ 政治的な問題を詩によって表現することで、漢詩の専門家としての存在意義を示そうとする立場。

ウ 地方の人民の苦しみを詩に詠むことで、自分が信望の厚い国守であることを都に誇示しようとする立場。

エ 道徳的な政治のあり方を詩で提唱することで、儒家への対抗勢力として政治的な問題解決を目指す立場。